ダラがいた港で、出会ったキオッジアの人々。

写真・文―たかのてるみ

❶

スイスの映画監督、アラン・タネールは、この港町キオッジアを大変に気に入っているらしい。もともとこの人の作品は港町シリーズと言ってもいいくらいで、日本でも公開された『白い町で』ではポルトガルのリスボンを、今秋公開予定の『幻の女』ではこのキオッジアを舞台にしていて、旅情溢れる港が大好きな監督として知られている。

『幻の女』は、タネール自身を思わせる主人公の、ジャン・ルイ・トランティニャン演ずる映画監督が、新しい映画作りに必要不可欠な理想的主演女優を探しまくるという物語だ。その幻の女優が、ダラという元女優で、キオッジアに住み、「シネマ」というカフェでウェイトレスをしている設定である。

一度は世に出た、女優という花形職業を捨て、小さな港町のカフェで、ひっそりとウェイトレスをし、フツーの女に戻ったつもりの女というのは、何となく扇情的に映るのではあるまいか。男から見たら……。そんな舞台にふさわしい港町キオッジアには、何もヴェネチアに行ったついでにではなくっても、行きたい気持にさせられる。それに〝ヴェネチアの妹〟と言われ、『幻の女』を観る限りでも、ヴェネチアによく似た運河や橋がいくつもあるちょっとうらぶれたこの漁港は、実に旅情を誘う。

ヴェネチアに滞在するはずの予定をキオッジアに変更して、ローマからホテルの予約をした。シーズン・オフの時期でもホテルは一杯で、キオッジアの港の極に立つ「ホテル・グランド・イタリアーナ」しか空いていなかったが、3人で8500円ということなので我慢することにした。

ヴェネチアのローマ広場に着くとすぐに公営バスに乗り、約1時間半、終点のソットマリーナのひと駅手前で降りると、そこがキオッジアであった。

「ホテル・グランド・イタリアーナ」は、立派な名前とは裏腹の、しかし値段には見合った、特には不自由のない、港町の情緒をそれなりに持ったホテルなのだった。

若いのに禿げあがった頭のレセプション兼、ボーイのフランコはとても親切で、モーニング・コールを頼むと、わざわざ部屋までやって来てドアを叩き、正確な時間に起こしてくれるのだった。部屋に電話がないから、この方法なのだが、難点は、その音でフロア中が起きてしまうこと。つまり、その日一番早く起きる客と一緒に、ほとんどの客が目覚めてしまうということである。しかし、ホテル代が高いことで有名なイタリアにおいてのこの値段、決してクレームをつける気など起きはしない。浴室にはシャワーしかなく、しかもそのシャワー・ヘッドの穴のほとんどがつまっていて、汗を流すことも容易ではない、そのことを知っても、その気にはならなかった。

＊

キオッジアは、ヴェネチアの南約30キロにあり、常にヴェネチアと運命を共にして来た小さな港町である。

ヴェネチア共和国盛衰の歴史の中で、

❸

❷

常にキーポイントとなった場所として知られている。例えば西暦800年には、ビザンチン帝国配下にあったヴェネチアが、神聖ローマ帝国から、自分たちの支配下になれと命じられ、これを拒否し戦いになった時、まっ先に攻撃を受け焼き討ちをかけられたのが、この地だ。1370年後半から1380年頃までいく度となく繰り返されたジェノバとの戦いの中では、敵国にとってもヴェネチア自身にとっても突破口としての拠点としてことごとく運命の波にもまれたキオッジアであった。

しかし、現在はリゾート地として知られ、特にキオッジアの中のソットマリーナ地域はヴァカンス時期には、海水浴を楽しむ観光客でごったがえす。

＊

観光局のマリオは、珍しい日本からの旅行者に目を見張って、いろいろとキオッジアについて教えてくれ、夜のエスコートまで申し出てくれた。

キオッジアの人間は、キオジョットと呼ばれ、大変に享楽的で、宵越しの金は持たないという精神で、その日その日を楽しく暮らすのがモットーなのだそうだ。その点、橋を渡ってすぐの隣接する地域、ソットマリーナの人間は節約型で、勤勉で。現在のソットマリーナにおける観光地としての発展は、そんな気質の賜物であろう。その点、漁師たちが多く暮らす港側のキオッジアの人々が、漁をしてその日に手にした金をその日のうちにトランプなどをしてすってしまうとい